
雪とコートとキミの笑顔

椎名緋色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪とコートとキミの笑顔

【Nコード】

N1745C

【作者名】

椎名緋色

【あらすじ】

暗闇を彷徨う主人公と、その周りの人の物語。

prologue · 生徒会

ここはどこだ。

全てが黒い色で埋め尽くされた空間。

宇宙？いや、違う。

色んな人の姿が見える。

様々なできごと、色　　。

ここはどこだ。

目が開いた。

何で開いたのか。周りの音が。

目が開いた。

そこは教室だった。

俺は少し暗さの残る教室で、眠りに落ちていた。

何でこんな処で・・・。

そう考えて記憶を辿ってみると、何だか思い出してきた。

友人の沢口明が、帰っていく姿。

その後、生徒会の会議が4：30からあるとか、クラスの谷山優利香が教えてくれた。

あと1時間もあるじゃねえか。と想着、俺は教室　ココ　で寝ることにしたんだっけか。

それで　　。

時計に目をやると、既に4：45分を回っていた。遅刻。

会議に遅刻。

「マジかよッ！！」

俺は急いで教室を飛び出し、廊下を走っていった。

急いだはいいものの、さてどうしたモンか。
俺は扉の前にいる。

この中はどうなっているだろうか。
地獄か、天国か。

俺は恐る恐る取っ手を手にかけて。
開けた、その瞬間だった。

黒板消しの力を思い知った。

古典的な、扉と壁の間に挟むようなアレじゃあない。
目の前から直に飛んできたのだ。

「遅いッ！！ 何分遅れてんの！！！」

「ゴホツ……。何も直に投げることはねえだろ！」
「遅れたアンタが悪いのよ」

そう言つと、彼女は謝る素振りもせず席に着いた。
今のを投げたのも、当然彼女である。

菅原七海 すがわら ななみ。生徒会役員の会長だ。
その外見は学園でも一、二を争う容貌である。

しかし、それとは裏腹に性格はヒドい。
いつもはキチンとしてるフリをしているが、ひとたび紐を解くと、
こうだ。

今日はまだいい。暴れているワケじゃあない。

これが本気になったときには……。
うっ……。考えただけで身震いしてきた。

「とつとと入りな。会議始めるわ」
冷たい声で、七海は言った。

「相変わらず冷たいっすねえ、七海先輩。香坂先輩を見習ったらど
うですか？」

「ヤマト君、言いすぎだよ。先輩に失礼だつて……。」
「何か言った？ 滝口、神奈」

彼女は鋭い目つきで二人を睨んだ。

二人は同時に、その目から逃れるように目を泳がせた。

滝口ヤマト たきぐち やまと は2年の役員。

書記の立場ではない物事を、いつも言う。

あの七海にだってあーいう口が聞けるんだ。

度胸だけは相当ある。

凄いモンだろう。

中崎神奈 なかざき かな は2年で副会長二人の片側だ。

中間的な立場で、意外とこの生徒会をまとめている。

なんというか、それも凄いといえる。

俺にはできないからな・・・。

滝口と仲がいいようだが、深い仲かどうかは知らない。

「みんなっ、・・・止めようよ。ケンカとか・・・よくないから・・・」

「さ」

「アンタはおどおどし過ぎだよ、由紀・・・」

香坂由紀 こうさか ゆき 、3年で書記を担当している。

物静かで、喋るのが苦手。

顔が小さくて童顔。

典型的な内気タイプなんだろう。

あまり話したことがないからわからないんだけど。

俺は黒板消しを拾い上げると、服を叩きながら生徒会室へと入った。

「・・・でさ」

ふと、七海が口を開いた。

何だ、まだ何かあるのか？

「アンタはいつまで寝てるんだよ！ 大村ア！！！」

彼女の鉄拳が、机に突っ伏して寝ていた彼の頭を殴った。

ゴズンという低音が響き、室内は静まり返る。

「ちよっ・・・ちよっと菅原さん・・・」

「ふあ？」

間の抜けた声とともに、彼は顔を上げた。

辺りをキョロキョロと見回すと、ポンポンと七海の肩を叩いた。

そしてもう一度、机へと堕ちた。

「また寝てるんじゃないっての!!」

今また寝に入っただのは、大村賢仁 おおむら けんじ。3年の役員。

カッコいい顔と優しい表情を持つ、いわゆるまあ、イケメンってやつだ。

学校へ来ると、すぐに寝に入ってしまうという凄い男。バイトをいくつも掛け持ちしているとか。

「おい、大村。起きろよ」

「んー、もう少し寝かせてくれ……。椿……」

寝言のような声で、彼はそう呟いた。

その姿を見た七海が、また大村を殴った。

俺はそのやり取りの合間を縫って、生徒会室を出て屋上へと向かった。

俺は椿涼介 つばき りょうすけ。

この生徒会の副長を担当している。

こうやって順々に説明したように、この生徒会には様々なキャラの人間がいる。

俺にとっては苦勞だ、まったく。

屋上に出ると、清々しかった。

始まりは、屋上だった。

next story page 1 . . .

屋上。

生徒会の魔の手（？）から逃れてやってきた場所。

ウチの屋上は、一つ目の奥に二つ目の柵があるせいか、鍵が開いている。

その鍵の開いている扉を押して、空からの風を浴びた。

清々しい風が、身体をすり抜ける。

俺はその風をまた受けようと、手すりに前のめりにもたれかかった。

日が沈みかけている夕暮れの光。

その光が落ちる方から、気持ちのいい風が吹く。

あまり市の中心に近くないせいか、街は静まり返っていた。

「全く、街に俺一人みたいだな」

どっかの歌詞を思い出しながら、空を眺めた。

カラスが鳴きながら空を飛ぶ。

少し眠くなってきたので、俺は夕日を背に手すりにもたれ掛かって

地面に座り込んだ。

そして、ゆっくりと眠りに落ちた。

ここはどこだ。

暗い闇の中、光が照らした場所。

そこに立つと、暗闇に幾つもの景色が浮かんだ。

思い出。あの頃の景色。

今。現在。いま。広がる景色。

そして、未来。何故か見えてくる未来の自分。

誰かと手を繋いでいる。

白いダッフルコートの女の子。誰だ。

分からない。

暗い。

ここはどこだ。

知らないうちに頭が右側に傾いていた。

目が覚める。感覚が蘇る。

気がつくくと、俺の頭は何か当たっている。

「起き……ました……？」

静かな空気に乗って、可愛い声が聞こえる。

「……え？」

俺は驚いて顔を上げた。

そこには、香坂が座り込んでいた。

両手で本を支えながら。体育座り。

別になんでもない光景だが、妙に綺麗に思えた。

夕日がバツクのせいだからだろうか。

「あの……えっと……その……。何だか気持ち良さそうだったので……。お隣に……。座らせて貰っていたんですけど……」

「

彼女の声が、次第に小さくなっていく。

隣に、彼女が座っていたとすると、俺はつまり。

彼女の肩に頭を乗せていたことになる。

おいおい、そんな事……。

恥ずかしくないっつーの。

「あ、いや。何っつーか……」

急に体が熱くなる。

あんまり話さない女の子の肩を借りて寝る!?

うつわ、なんてことしてんだ俺。

「気持ちよく、眠れましたか？」

「あー……。そ、そうだな」

俺的には、すごくギクシャクした雰囲気になっている。

どうしよう、どうしよう。

「あっ……の……、香坂？」

「えっ、はい。何ですか……？」

「どうしてこんな屋上に？」

ハテナマークが沢山の会話に、俺は質問を投げかける。

「それはですね……」

彼女は小さい口を、大きく開いた。

「本が読みたかったから、です……」

また声の後ろのほうで、小さくなった。

沈黙がもう一度、二人の間を過ぎ去っていく。

何だか恥ずかしい空気だったので、俺は立ち上がって手すりにもたれ掛かった。

景色がとても綺麗に、夕日に沈んでいく。

「綺麗ですよ、この景色」

彼女も埃を払って立ち上がり、俺の横にもたれ掛かった。

「神様見渡す限りに きれいなタンポポを咲かせてくれ」

この歌詞、ちよっとだけ今の景色に合っていないか？」

“神様見渡す限りに きれいなタンポポを咲かせてくれ 僕らが大人になっても この丘を忘れぬように……”

タンポポは、沈む夕日に移る街影。

神様は、この空全て。

“この丘”は今いる屋上ととらえて。

「タンポポの色 。確かに、そう考えてもいいですね。……

誰の曲なんですか？」

「ん……誰だったかな。忘れちゃった。ま、でも歌詞の本当の意味とは違うと思うけどな」

そう言っつて、俺は少し笑った。

彼女も少し、笑った。

そして、二人とも顔を赤らめてすぐに背けた。

このままの雰囲気になると、危ないかもしれない。

そう思い、俺は夕日に背を向けた。

「そ．．．そろそろ、俺帰るな」

「あつ、はい．．．」

最後にじゃあな、と一言だけ言っつて、俺は屋上を後にした。

「あの．．．っ、その．．．」

「ん？」

「また．．．お話して、くれますか．．．？」

彼女の声が小さくなる。

俺は、少し笑って、

「おう、いつでも声かけてくれ」

そんなことを言っつて、屋上の扉を開けた。

あとで気がついたんだ。

彼女は本を読み、屋上へ来たんじゃないことを。

俺と話したために、屋上へ来たんだと。

鈍感な俺は、そんなことも気がつかなかった。

久しぶり、だった。

あんなにも普通に、女子と話したのは。

1・2年前は優利香と気軽に話していたけれど、最近は少なくなつた。

意識し始めたんだらうか、自然と。

俺にもわからなかった。

「どした、涼介。なにかあつたか？」

「いや、なんでもねえよ」

翌日、やけに元気な大村とともに、屋上で昼食をとっていた。

まさか昨日の一件を話すわけにもいかないし、と一人で考え込んでいた。

「それにしても、今日は寝ないんだな」

「あつたりまえだ。久しぶりに休みが取れたんだ。元気よくいくぜえっ」

今日の大村は、どうやらバイトで休みが取れた故の元気、だそうだ。十分に家で寝てきたのか？

それでもやっぱり授業中は寝てただけだな。

「さて、と。俺はちよつと用事があるから行くぜ」

「何の用だよ」

「菅原にちよつと呼び出し食らつててなー。怖えんだけど」

そゆことだな、と大村は言つて屋上を出て行った。

仕方ないか……。

俺は日の当たらない場所を探すと、そこに寝転がって眠りについた。ちよつとだけ、冷たかった。

ここはどこだ。

暗いくらい闇の中。

小さな光が消えかかっている。

しかし、その光は消えそうなくらい輝いているが、消えなかった。

あの光は何なんだ。

暗闇の中の自分は、その光を掴もうとした。

しかし、その光には手は届かない。

あの光は、俺への光なのか。

その光はいつこうに消えてはくれなかった。

分からないよ。

暗いだけの世界。

ここはどこだ。

もう日が落ちていて、瞼を閉じた中からじゃ暗闇しか映らない。

「寒くない・・・ですか？」

「いや・・・あんまし」

言葉を言いかけて、ハッと目が覚めた。

彼女の顔が、眼前にあったのだ。

「うおおおう!?!」

俺が驚いて声を上げると、彼女はビクツとなって後ずさりした。

うわ、一瞬引かれたか？

「ど、どうもです・・・」

「香坂」

「いつでもいいって・・・言ってたので・・・。次の日も・・・来るかと思って・・・そしたら・・・」

「俺が寝てたワケか」

彼女はコクリと頷いた。

確かに、いつでもいいって言ってた。

けれど、次の日とはなあ。

「同じ・・・クラスだけど、やっぱり聞き出せなくて、その・・・」
そっか。

香坂と同じクラスなんだっけ、俺。

やっちまっただなあ。

「スマンな。俺はいつでもこの場所にいるから。・・・たぶん」

「えっ、あの、その、謝ってもらわなくても・・・。あたしも・・・
悪いですから」

二人して謝ってしまったので、緊迫した空気が少し消えてしまった。

俺はうはは、と笑った。

彼女も笑った。

「さて、何を話そうか」

「そう・・・ですね」

日が落ちた空には、点々と星が煌めいている。

月は、三日月だった。

「・・・どうして、俺と話そうなんて思ったんだよ」

静かな空気の中、彼女に向ける問いかけ。

問いかけの答えは、すぐには返ってこなかった。

また、この空気の中に沈黙が交わる。

「えっと・・・」

彼女は口を開きかけたが、また空気を沈黙に戻した。

数回しか話したことのない、二人の間の気まずい空気。

「話せないなら、別にいいんだけどな」

「えっと、その、そういうことじゃなくて・・・」

「ん？」

「あたし、あんまり人と話すことが得意じゃないんです。だから、

椿君に・・・」

なるほどな。

確かにこんなにおどおどとしてたら、人とはマトモに話せたモンじゃねえ。

ってこれじゃまだ理由聞けてねえじゃん。

「何で、俺なんだ？」

「それは……。生徒会の中で一番話しやすそうだったからで、えと、その……」

彼女の顔が赤くなっていく。

……何でだ。

何で顔が赤く？

彼女の顔は、もう湯気が出るぐらい。耳まで赤くなっている。なんだ、なんだよ。

「何なんだよ！」

「えと、だから、そうですね……」

叫んだ拍子に、何かが切れた。

彼女の言葉が耳に入らない。

「あたしは……」

あ、崩れる。身体が落ちる。

身体が落ちていく。

「椿君！？ 椿君、どうしたの！ 椿君！！」

身体が崩れていく。

誰かが押さえている。

分かんねえ。

分かんねえよ。

ここはどこだ。

真っ暗闇の、世界の中。

彼女と手を繋ぐ姿、唇を重ねる姿。

白いダブルコートを着た女の子。

一つ一つが、暗闇に在る光へと映る。

一つ一つが、輝いている。

けれど、なんだろう。

身体が何度も揺れ動いている。
ここはどこだ。

「おい、涼介。椿涼介」

誰かの声と揺さぶりで、俺は目が覚めた。

身体がだるく、頭がクラツとする。

すごく眠い。

「大村」

かろうじて目に映ったのは、大村の姿だった。

「お前いつから寝てたんだ？寒くねエのか」

「いつって」

いつ。

いつからだろうか。

いつから俺は、寝ていたのか。

「夢？」

「はあ？」

昼休みごろから寝ていたのは覚えている。

けれど、その後起きた時には香坂がいた。

彼女が俺のトコにやってきた。

理由を聞けば、顔を赤くした。

こんなうまく行ってるシチュエーションがあるもんか。

さしずめ俺の妄想か、夢か何かだろう。

「マジかよ・・・」

「だから、どうしたんだっつもの」

「いや、何でもねえ・・・」

俺はがつくりと肩を落とし、トボトボと屋上の扉へと向かった。

大村の声が聞こえたが、あんまり耳には入らなかった。

入れるつもりも、今のところなかった。

「椿君」

屋上にひとつ、小さな声が響いた。

帰りに大村の家に寄らせてもらった。
何となく、時間を潰したかったんだ。

「うまいな」

「だろ？」

今口にしているのは、イカの足。

何でイカの足かって？

そりゃ、なんと言うか。

「焼きイカはな、マヨネーズ付けて食うとうまいんだ。そんでもって、ビールに合うんだよなあ」

「ビールってお前・・・酒のつまみかよ」

「おう、そうだ」

イカ足にビール。まさにオヤジの定番・・・？

満面の笑みを浮かべて言う大村に、俺は心の中で一言呟く。

お前一応ハタから”イケメン”といわれる部類に入るんだぞ？

こんなんでだいじょぶなのか？

30分ぐらいして、俺は帰る支度をした。

いつまでもいる訳には、まあ行かないだろうし。

「もう行くのか」

「おう。大村んトコに悪いだろ？」

俺はそう言うと、暗がりの道へと歩いていった。

ここはどこだ。

その言葉が、最近夢の中で繰り返される。

暗闇の中で、何も見えない中で。

何かが見える、世界の中で。

声だけが響く。自分の声なのか、はたまた他の人間の声なのか。時折見える光も、自分へ向けられたものなのか。最近よく、わからない。

帰り道を少し外れた、細い道。

その道の先に、小さな山への入り口がある。

その山へ、俺はちょっと登ってみることにした。

小さいといっても、意外とこの街が見渡せる場所だ。

昔、父とよく来ていた場所。

小さなその山から見える街が見たくて、俺は足を進めた。

ただ、それだけ。

まあ、人間は小さなキツカケから、小さなことをしてみたくなるものだ。

あと少しで、小さな山頂だ。

と、思ったその時。山頂付近に人影があった。

人気がない場所に、人影。

「あ

電灯が逆光になってこっちからは確認できないけれど、あっちのほうは俺を知っているらしい。

もう少し近づいてみると、知っている顔が光に照らされた。

「優利香か」

少し暗がり、光に照らされて。

谷山優利香。幼稚園からの幼馴染。

それ以上の関係でも、それ以下の関係でもない。

「久しぶり、涼ちゃん」

「ちゃん付けは止めるって、二年前にも言ったろ？」

小さな展望台にいた、彼女の隣に俺は立った。

彼女は少し暖かそうなセーターに、長いスカート、首にマフラーをしている。

あまり遠出しそうな格好じゃないな。たぶん近場にも出かけてたんだろ。

「こうやって話すのも、珍しいな」

「珍しいとか言わないでよ。話す機会がないだけでしょ？」

そうだな。と俺は笑っておいた。

ただ沈黙だけが、静かに流れる。

彼女は何も、口にしなかった。

街の一面を目に映しこむ。

光が輝いたり消えたり、まるで俺らに信号を送るかの如く。

「ここには　　たくさん思い出があるよね」

「ここ？こんな小さな丘にはあんまし・・・」

「丘じゃないよ。この街」

この街に、思い出　　？

そんなモン、俺が生意気な口を叩いてたことぐらいしか覚えてねえな。

「沢山あったよね。二人で買い物に行ったり、一緒に海に行ったり。小学校で一緒に写真撮る時、逃げ出したこともあったね。涼ちゃん」

「なんだよ、いきなり」

優利香の眼が、いつになく真剣になって空を眺めている。

この暗い暗い空、何も見えない空を。

こんな優利香見たことねえ。

「私ね、涼ちゃん」

「ん」

「卒業前に、この街を出ることにしたんだ」

彼女の口から出たのは、俺の考えの範囲外の言葉だった。

「出るって言っても、お父さんと一緒に上京するだけ。私に合った仕事があるんだって」

長く一緒に過ごして来た優利香が、いなくなる。

何で、こんな、突然。

「ほら、私の夢。風景画を描いてみたいって。向こうにいい画家さ

んがいるんだって」

彼女は何事もないかのように淡々と話を進めていく。

その間、俺の頭の中は混乱でいっぱいだった。

「涼ちゃんには、最初に聞いておいて欲しかったんだ。それと

」

口を止めて、彼女はポケットから何かを取り出した。

小さな紙切れだった。

「涼ちゃんいじつ張りのクセに、寂しがりでしょ。だから、私の携

帯番号」

「おう」

「寂しくなったら、いつでもどーぞ」

「おう」

虫が集まる電灯が、俺たち二人を照らす。

その光が、なんだか悲しく思えた。

「今日言えて良かったー。言わなきゃ言わなきゃって思ってたから」

「いつ、行くんだ？」

ぐーっと背伸びをした彼女は、ん。と言った。

「冬休み」

「・・・そっか」

あともう二ヶ月もないじゃねーか。

急に静けさを増したように思えるこの場所が、妙に息苦しかった。

こういう時って、なんか言葉とかかけてやるモンだよな。

そう思えても、何も言葉が出てこない。

喉のあとちよつとのところで、言葉が詰まる。

「涼ちゃん・・・？」

気がつくのと、俺は彼女を後ろから包み込んでいた。

彼女の服越しに伝わる暖かさが、心を休ませる。

自分の、やけに静かな呼吸がなんだか嫌だった。

彼女は俺の身勝手な行動に、すつと身体を預けてくる。

「まったく、寂しがり屋なんだから」

突然の出来事にも、全く身体がこわばってない。
慣れてるのだろうか。

そこまで、俺の行動を予想していたのか。

「ごめんね」

彼女は無理矢理俺のほうを向くと、背伸びした。

届かない、背の高さ。

唇と唇が触れる。

一瞬時が止まったように思えた。

ふんわりとした感触。

柔らかさ、滑らかさ。

そのいろんなものあれやこれが、感覚として残った。

「・・・ぶはっ」

彼女は唇を離すと同時に、吐息を漏らした。

息、止めてたのかよ。

彼女は俺のほうを向くと、上目遣いをした後呟いた。

ごめんね、と。

その表情・仕草が、俺を駆り立てた。

駆り立てられた気持ちは、彼女を柔らかく抱きしめる。

「ごめん」

「いいんだよ、涼ちゃん。私でよければ」

優しい声が、耳に届く。

その声が、やけに悲しい声に聞こえた。

華奢な彼女の身体は、やっぱり暖かった。

暗闇の空に、ネコの声が響き渡る。

気がつくのと、朝だった。

あの後、彼女は優しい表情を浮かべて帰っていった。優利香は強い。けれど、本当は脆い一面を持つてる。

たぶん、帰ってから泣いていたかもしれない。

少し、学校に行くのが辛くなった。

「涼介ー、おはっス」

「明」

後ろから、沢口が背中を叩いて声をかけてきた。

沢口明。中学からの親友で、イイ奴だ。

見かけによらず頭がよくて、俺も時折世話になっている。

当の本人はあんまし思っていないらしく、能天気にしてるけど。

「どしたー？何かあったか？」

「何で」

「なーんか暗くなってるぞ。顔とか」

彼が顔を叩いてきた。

どうやら俺は、顔に出るらしい。

「考えすぎには気を付けたほーがいいぞ？ほら」

明はポンと、俺じゃないほうの肩を叩いた。

その肩は、二年の滝口ヤマトだった。

「あ、先輩。どもっス・・・」

妙に元気のない声を、滝口が口から漏らす。

「彼女のこと何かあったか？」

「・・・なんで知ってるんすか、沢口先輩。まあ、それなんすけどね」

「滝口と知り合いなのか、明」

「サッカー部の後輩だったんだよ」

滝口の肩をポンポンと叩いて、明は笑った。
サッカー部の後輩なのか。

生徒会で元気なもの、スポーツ系の部活だからか？

「あ、椿先輩。いたんスか」

落ち込んだ顔をヒョイと上げ、滝口が言った。

その言葉に、少し腹が立つ。

そんなに存在感ないか、俺は。

「で、彼女のコトで何があったのさ？」

「ケンカしたんス。カナと」

「ほーう、中崎か。いいもんゲットしたじゃんか」

カナ。中崎神奈のコトか。

噂にはなってたけど、本当だったんだな。

「どうしようか、悩んでんスよ。ハア・・・」

彼はさらに俯き加減で呟いた。

何だか入っちゃいけない雰囲気だなあ。

俺は歩く速度を速めて、学校に入ってしまった。

めんどくさくなった。

二時間目を過ぎた辺りから、というか。いつもなんだけど。

勉強なんざやりたくねえ！。っていう心が動く。

そんな気持ちから、授業をサボる。

サボって、いつもの屋上で一人。

手すりにもたれ掛かる。

吹いた風が、身体を包み込んだ。

「We will meet you by all means.
With a sound of the same beating
as a mark and.

I am here. Because I call it when.
When tired reasons occur

a t t h e s a m e t i m e a n d s h a k e , I
k n o w a b o r n r e a s o n . ” 「

どこかで聞いた英語を、口ずさむ。

僕は、出会う。

目印をひとつ、見つけて。

それに向かって駆けていく。

駆けたその先に、自分自身の相手を見つけられるのかもしれない。

急に、昨日のことが頭を過ぎった。

途端に顔が、耳が熱くなる。

恥ずかしかった、正直。

自分の行動もそうだが、彼女の行動もそう。

抗わない彼女を抱きしめた瞬間、心が安らいだ。

「・・・優利香のヤツ」

誰にも聞こえないくらい小さい声で、呟く。

もしかしたら、アイツは。

なんて、妄想を膨らませてしまう。

直後、屋上の扉がゆっくり開いた。

「っ！！？」

誰か、来た。

同じサボリ魔か？

はたまた俺を探しに来た誰かか？

さっきまで顔を赤くして他から振り向きにくい。

しかし、なりふり構っていられず振り向いた。

その視線の先には、周りをキョロキョロと見渡す少女がいた。

俺が少女に目を合わせると、彼女は途端に顔が明るくなり、こっち

へ駆け寄ってきた。

「あいつ、その、椿くんですよね」

「お、おう」

「よかった・・・。昨日は倒れちゃうからどうしたかと思って・・・」

「

倒れた、って。

あー、俺の夢のことか。

何で知ってる？

あれは夢じゃないのか？

彼女はスカートを叩くと、俺の隣にちよこんと立った。

ポプカットの髪の毛が、弱い風になびく。

「授業は？」

「あたしのクラスは・・・自習なので。抜け出してきたんです」

「そ、そうか」

抜け出すっていつてもなあ。

そういうのって、意外と成績に響くんだぞ。

「今日は何は話すんだ？」

「そうですね・・・」

少しの沈黙が流れる。

お互い何も話さないから、振り向く。

同時に目が合う。同時に逸らした。

「えと・・・。夢、ですかね」

「夢？」

「そう、夢です。未来への希望、叶えたい望み。様々な夢

椿君には・・・どんな夢がありますか？」

「夢・・・」

夢。自分の自分の叶えたい夢、どりいむ。

あんまり考えたこともない。

適当に大学に行って、このまま一人暮らし。

そんな光景が、頭を過ぎる。

やっぱり考えなきゃいけないか？

自分の進むべき道、歩く道を。

でもやっぱり。

俺は遠い空を眺めながら、呟く。

「俺には　ねえよ」

「え？」

「俺には夢が、ねえんだわ」
寂しい風が、優しく吹いた。

この時は、未来も何も。

彼女のことなんて考えていなかった。

「俺には、夢がねエ」

その言葉を呟いた時、彼女は驚いた表情をした。

そして一瞬俯き、もう一度顔を上げた。

「そうなん・・・ですか。なんだか悪かった・・・ですね」

「いや、考えてないほうが悪いんだ。・・・ところで、香坂は？」

自分のことなど別によかったので、今度は香坂のを聞いてみることにした。

香坂は少し口を閉じてから、ゆっくりと開いた。

「あたしは・・・小説が書きたいんです」

「小説？羅生門とかそーいうのか？」

「いえ、そういう難しいのじゃなくて・・・。」
” 銀河鉄道の夜” とか、ファンタジーなものや恋愛ものを・・・。」

最後のほうは聞き取りにくかったが、なんだ。銀河鉄道？

「銀河鉄道の・・・って何だ？」

「あつ、えと、その・・・。宮沢賢治の” 銀河鉄道の夜” です。読んだこと・・・ないですか」

他にも” 注文の多い料理店” とか沢山あるんですよ。と言われたが、すべて聞いた覚えのないものだった。

けれど、宮沢賢治なら聞いた覚えがあった。

うん、たぶん。

「そうか・・・小説家か・・・」

「いえ、あの、その。そういう大きなコトじゃなくて・・・」

「ん、そっか。まあ、夢は大きくな」

えと、えと、という彼女の肩を、ポンポンと叩いてやった。

叩いた意味は自分でもわからなかった。

「・・・ありがとう」

彼女はニツコリと微笑んだ。

空を少し、眺める。

鳥が空を飛び、電線を揺らした。

「あのね・・・椿君・・・」

「あのさー、”椿君”ってなんかくすぐったいから、涼介でいいよ。涼介で」

なんとなく、だった。

そもそも”君”と付けられるのが嫌。

呼び捨ててくれたほうが幾分かすつきりする。

「えっ、そんな、あの・・・」

「別にいいから」

「あ・・・うん・・・。涼介・・・君。あのね・・・」

やっぱ、君がつくのね。

彼女は俺の名前を口にする。

その表情は、やけに赤かった。

「あたし・・・涼介君が・・・」

少し、言葉が詰まった。

その時を狙ってだったのか、屋上の扉が勢いよく開く。

それに反応して、二人とも一緒に身体を反応させた。

バガンと、重いはずの扉が開く。

「椿ッ!!! ここにいたのね? 生徒会の書類が未提出だから、来なさい!!!」

「はア!? お前いきなり来て何を」

「いいから来な・・・っさい!」

現れたのは、七海だった。

彼女はいきなり俺の襟を掴むと、勢いよく引つ張る。

その衝撃で、尻餅をついた。

「あの・・・っ、菅原さん?」

「由紀。アンタ、こんな男に誑かされちゃダメよ」

それだけ言っと、彼女は俺を引つ張って屋上を出た。

「ちよつ、お前離せ！」

「・・・」

「離せつての！！」

何を叫んでも、彼女の反応はない。

「七海！」

「由紀と何、話してたの」

突然口を開いたかと思うと、意外なことを聞いてきた。
ん・・・むう。

「それは・・・」

「由紀の事、襲うなんて事考えてんじゃないでしょうね？」

「そんな事ねエって」

当たり前だ。

いくら三年になつて、そーゆうコトに欲求持ったりしたとしても、
そんなコトに走るよーな人間じゃねえ。

いや、あんまし否定できんけど。

「別に、これといった話はしてねえよ」

「・・・そう。ならいいわ。とりあえず、書類は出してよ」

そう言われて、書類を手渡された。

手渡したときの彼女の表情は、なぜか安堵の表情だった。

・・・なんでだ。

全く持つて訳がわからなかった。

香坂、そういえば。

置いてきて大丈夫だったんだろうか。

夕焼けの空が映える。

時期が時期だけに、木枯らしが吹く。

寒いなあ、と呟きながら歩いた。

自分の靴の音だけが、路に響く。

一步、また一步と。一人の足音しか聞こえない。
俺は一人だ。

このまま行けば、この先も。
別に。もう慣れたんだ。

二年前に、事故で親二人が死んでから。

何でだよって。何で俺の家族なんだよって。

必死に叫んでた日々があった。

けど、もう慣れた。

一人暮らしにも慣れた。

でも、知らないところで孤独さは身体を蝕んでいく。

「一人・・・かあ」

一人暮らし、結婚せず。

生きていく自分を素晴らしく思う。

なんで？

寂しくはないのか。

結婚して、子供を授かる事が栄光みたいに。

子供の生まれてきたときの声がまるで歓喜の声に聞こえるかのよう
に。

なんでだろうか。

ふと、道の脇に段ボールの中で蹲るネコを見つけた。

クロネコ。クロイネコ。

眼を見ると、ガラス玉のように綺麗な瞳だった。

「お前も・・・一人か」

俺がそう呟くと、ネコは

「にゃーん」と返してきた。

多分、そうなんだろう。

「俺も一人だ」

「にゃーん」

笑った。

ネコ相手に笑ってやった。

鳴き声が、妙に可愛く思える。

多少迷った。

数分後、俺はネコを抱えて歩き出した。

「にゃーん」

黒いシツポには、可愛らしいリボンが結んであった。

鳴き声が、響く。

オスかな。メスかな。

どちらにしても、俺はほんの少しだけ一人じゃなくなるみたいだ。

少しの間だけ、孤独から離れた。

それが本当に少しだったかは、覚えてない。

これは記憶のカケラだから。

部屋に入ってすぐに、段ボールを探した。

あのまま持つてくればよかった。

なんて頭の中でぼやきつつ、潰れた段ボールを見つけた。

そのダンボールを丁寧に組み立て上げ、中にネコを置いた。

「なーん」

少し鳴き声が弱くなっている。

「はいはい」

俺はすぐに浅底の皿に牛乳を注ぎ、小さな毛布を持った。

毛布をかぶせ、皿をネコの前に置く。

「飲め飲め」

「なーん」

ネコはペロペロと少し舐めたあと、美味しそうに牛乳を舐めた。

明日病院に連れてって、オスメス調べてもらうか。

「名前は明日だな」

「なーん？」

呟く声が、部屋を通り抜けた。

土曜日、とりあえず学校のない日。

12月も前半、試験や勉強などで忙しい中、俺はペットショップへと向かった。

オスカメスカ。ついでに年も聞いてみた。

メスの2才だそうだ。

「メスカ・・・じゃ、俺の好きな”蜜柑”かな」

「にゃー？」

「お前の名前だよ。蜜柑」

意味をわかったのか、嬉しそうに

「にゃーん」と鳴いた。
俺も喜んで撫でてやった。

月曜。

俺は肩にネコを乗せて登校した。

結構嫌がるかと思ったが、案外すんなりと乗ってくれた。

学校の校風は自由だった気がしたので、何も言われなかったら怒られた。

いや、先生にじゃない。

七海に。

「生徒会のクセに……。何ネコなんか連れてきてんのよ……」

「んー、気分」

「気分つてアンタねえ……」

七海はガツクリと肩を落とす。

「いいじゃねエか。もう終わりなんだし」

「なーん」

蜜柑の鳴き声が変わった。

腹でも減ったのか。

俺はため息をつくと、カバンから紙皿と牛乳パックを取り出した。

牛乳を皿に注ぐと、蜜柑の前に出した。

「なーん」

蜜柑は可愛らしい声を上げると、牛乳を舐めだした。

どうやら腹が減っていたらしい。

「可愛いんだからいいじゃないっスか。先輩」

「そうですね……。ネコさん可愛いですよね……」

滝口に合わせて、香坂が口を揃えた。

滝口の顔はまだ浮かない表情だった。

そのせいか、神崎は今日来ていない。

しかし、それ以上に珍しい事が。

「ま、会長も怒る事じゃねエでしょ」

「あんたはうるさいの。大村」

会議中に大村が起きている事はかなり珍しい。

まったく持って珍しい光景に、俺はケータイで写メを撮っておいた。

「・・・もういいわ。とつとと解散して」

「うえ？まだ始めて10分も経ってないっスよ？」

「いいの。今日はとりあえず書類渡すだけだったし」

そう言つて、机の上にあつた書類を、ヒョイと渡した。

なんだか最近投げやりだな。

何かあつたのか？

そう思いたくなくなった。

ネコ。ネコ。ネコ！？ ネコ。

「どこへ行つても驚くのか、ネコに」

校内でネコを肩に乗せながら歩いていると、周りのみんなが驚いた目でこつちを見てくる。

やっぱり学校にネコなんて珍しいか。

すれ違つた教頭なんて、

「ほほう、クロネコか」

と呟いて去つていったもんだ。

ふうん、と思いつつ、俺は校門を出た。

「 待つて」

ふと、後ろから呼び止める声がある。

俺か。

「・・・誰だ？」

振り向くと、そこには優利香が立っていた。

「涼ちゃん、あのね・・・」

「優利香じゃねーか、久しぶりだな。立ち話もんだから、一緒に帰ろうぜ」

「え、あつ、ちよつと！」

嫌がってた彼女の腕を強引に引つ張った。
どーせあの話だろ。聞きたくねえよ。

・・・恥ずかしくなるから。

「あのね、涼ちゃん。涼ちゃんってば！」

「何だよ」

「この前は、ゴメン。私、どうかしてて・・・」
やっぱかよ。

すんなつつつてんのに、優利香ってヤツは・・・。

「いいよ。俺にも責任あるし。行くとこまで行かなくて良かったじやねエか」

「行くところ・・・って、涼ちゃん！ 何考えてんのよ！！」

「うはは、嘘だよ嘘」

笑いに流して誤魔化したのが、何と言つか、もう心が跳ねてる。

この前の事からだろうか。彼女を見ると、やけに胸が跳ね回る。
なんだよ、この気持ち・・・。

そんな事を考えていると、急に身体が熱くなってきた。

「どうしたの、涼ちゃん。顔赤いよ？さてはヘンなこと考えてたんじや・・・」

「そ、そんなんじやねエ！断じて、断じてだ！」

必死に弁解の言葉を言うと、彼女は笑った。

「あはは、涼ちゃん必死すぎだよ。そんなに必死にならなくてもさ

」

言葉が途切れる。

何だよ、“必死にならなくても”？

彼女は言葉を飲み込みかけて、口を開いた。

「必死にならなくても、たぶん涼ちゃんと同じ気持ちだから」
言葉を言い終えた彼女の顔は、真っ赤に染まった。

その顔を隠そうと、俯く。

沈黙だ。

恥ずかしがる彼女が、目の前にいる。
俺がいる。

蜜柑が鳴いた。

暗がりの空、白くなる息が宙に舞う。

俺の心臓が、高鳴った。

「涼ちゃんと、同じ気持ちだから」

優利香の口から、その一言が零れた。

俺の気持ちと同じ。つまり。

「その・・・、ヤラシイ気持ちとか、そんなんじゃないんだよ。うん」

俯きながら、彼女が声を出す。

恥ずかしがってるのはわかる。当たり前だ。

こっちだって恥ずかしいってのに。

「わ、分かってるよ。分かっているけどよ、つまりその。俺と同じってコトは」

「うん。涼ちゃんが・・・好き」

「俺なんかのどこが？」

「ん、なんだろ。・・・全部かな」

彼女は顔を更に赤くし、遂には顔を手で覆い隠した。

口調もいつからか、変わってる。

本当の優利香はこうなのか？

突然の事に、頭があんまし回転してくれない。

彼女の口が、静かに開く。

「やっぱりダメ、だよ。突然すぎるよね。・・・ごめん」

次第に言葉が小さくなっていく。

「私なんか、なんにもないもんね。スタイルいいわけじゃないし、顔もかわいいわけじゃ」

「そんな事ねエよ」

「ふえ？」

泣きかけていた彼女の手を取り、引き寄せる。

そしてそのまま、やさしく抱きしめた。

やさしさの加減が分からないから、すこし強かったかもしれない。

「涼ちゃん・・・?」

「何にもなくねエよ。可愛いし。何より、抱きしめたら暖ったけエじゃねーか」

・・・恥ずいコトを、躊躇もなく口に出している俺がいる。

「なんつうのか、説明できねーくらい胸がドキドキすんだよ。コレが”恋”ってヤツなんかな?」

「・・・ほんとだ、すごくドキドキって音がする。私も、ド

キドキする。一緒だね」

「上目遣いすんな。恥ずかしい」

俺はそう言って顔を背けた。

彼女は軽く笑って、上目遣いを続けた。

俺は彼女を見る事ができなかった。

恥ずかしいね。

そうだな。むちゃくちゃ恥ずかしい。優利香のせいだ。

うー、そんな事言わないでよ。

うはは。

学校では、ナイシヨだよ?

なんでだよ。

・・・恥ずかしいじゃん。

そうだなー。

あのあと数分間笑いあった。

楽しかった。

少しもやがかかった気持ちがあつさりした。

そんな感じだった。

「なーん」

「ん、ゴメンな蜜柑。帰ったら牛乳やるから」

「蜜柑っていうんだ、そのネコくん」

「くんじゃねエんだ。メスだからな」

蜜柑を撫でながら、笑った。

「ふうん。よろしくね、蜜柑ちゃん」

「なーん」

彼女が蜜柑を撫でると、それに答えるようにして蜜柑が鳴いた。

彼女が笑った。

俺も笑った。

「それじゃあ、帰るね」

「送っていくか？」

さり気なくそう言っていると、彼女は

「いいよ。だいじょぶだから」

「・・・おう」

手を振る彼女に、手を振った。

彼女が消えていくまで、俺はその場に立ったままだった。

夕日が沈む。沈んでいく。

その光景がとても綺麗だ。

影が伸びていく。

ゆっくりゆっくりと、伸びていく。

なんだか遠くへ、行きたくなった。

「なーん」

「分かってるっての」

いつものように牛乳を皿に注いで、蜜柑にやった。

蜜柑はそれを美味しそうに飲んだ。

「それ飲んだら、寝ろよ」

「にゃー」

俺の声に、蜜柑は答えた。

優利香も俺が好き、か。

この前まで、幼馴染だとうたとか騒いでたくせに……。
しっかり意識してるじゃんかよ。

前から思ってたのかもしれないけど。

俺はひとつため息をついた。

座っていたベッドから立ち上がり、窓から外を眺める。

点々と、小さな星のようなものが目にとまった。

輝いていた。星が。

星を見終え、ベッドに寝転ぶ。

あ、電気。と思って電気を消した。

彼女の温もりが、まだ腕の中に残っていた。

空気が清々しい。

なんだろう。

今日はなんだか、気分がいい。

せつかくの休みだったので、俺は優利香とどこかへ出かけようと思
った。

彼女の思いを聞いてから、俺の心は躍っていた。

自分を好きになってくれる人間がいた。

その気持ちか、俺の心を躍らせている。

そんな気持ちに駆られて、彼女を誘う事にしたのだ。
そう。

彼女を誘った、のだが。

「何でお前らがいるんだよ」

「いいじゃねーか。多いほうが楽しいだろ？」

「気が合うな、沢口。俺もそう思った」

「・・・私が呼んだの。多いほうがいいかって」

優利香は笑顔でそう言った。

「で、香坂と・・・」

「あ、はい。今日はよろしく・・・です」

「何で私がアンタらの子守りみたいな事しなきゃいけないわけ？」

舌っ足らずな香坂をどけるように、七海が割り込む。

彼女は丈の長い黒いコートを羽織り、腕組みをして構えていた。

まるで引率者。そんな感じを醸し出している。

大人びてると言うか、堂々としていると言うか。

流石だなあ。と感心しておく。

「まあまあ、菅原さん。そんなこと言わないで、楽しもうよ。ね？」

「・・・」

今日俺たちが来たのは、遊園地。

まあ、デートスポットとしては意外といい場所。みんなで遊ぶにしたってそこそこいい場所だ。

そうなのだが。

メンバーがね。うん、メンバーが。

女のコ組（勝手に付けた）はいいとして、沢口と大村って……。せめてここは俺一人で両手に花が良かったんだけどー……。

「いいじゃねーか。今日は楽しもーぜ」

「そうだよな、沢口。ほら、涼介も」

肩を叩かれて、俺はひとつため息をついた。

「まあ、こんな正門で話すのもなんだから入ろうよ。ね？」

優利香の一声で、俺はしぶしぶ足を動かした。

「ひゃっほう！」

「あ、あ、アンタ達、よく笑ってられるわね……」

ジェットコースターに乗ってきた沢口と大村、七海、優利香が戻ってきた。

七海は優利香に引つ張られて乗らされたんだけど。

俺は乗らない。うん、乗らない。

絶叫系は苦手だからね。

「こっから、二人一組行動にしねえ？みんな纏ってるのも何じゃねエか」

沢口の謎の提案により、二人一組なるものが決定した。

方法は……グーチョキパーのアレ。

大村は香坂と。

沢口は優利香。

つまり、俺は。

「何で私がアンタなのよ。っていうかもう誰でも嫌だったんだけど」「酷いな、七海」

「ま、一番マシかもしれないわね」
そう言うと、彼女はすぐに歩いて行ってしまった。
ちよっと待て！と叫んでも、聞いてくれない。
何だよ、全く。
女ってなんで素直じゃねえんだ。

「待てつての！」

「何よ」

「何で急ぐんだよ。どっか行きたい所でもあんのか？」

彼女は少し悩んだあと、ポンと手を叩いた。

「ないわ。強いてあげれば、座りたい・・・かな」

「だったらそこに座るか。な？」

・・・ん？

なんだか今喋り方が変わったような。

まあいいや。

俺は近くにあったベンチを指差したあと、彼女の背を押す。

彼女は背を押されるのを嫌がりながら、そのベンチに座った。

俺もその隣に座る。

沈黙の空気が静かに流れる。

風が冷たい。12月だからか。

マフラー買つかな・・・。

「ねえ、椿」

「ん？」

「やっぱり、こんな性格じゃダメなのかな」

・・・はあ？

急にさっきのように、彼女の口調が変わった。

いつもの彼女にはない、柔らかい声。

雰囲気まで、変わった。

「ど、どうしたんだよ。急に」

「最近ね、思うの。この性格をずっと通ってきて来たけど、なんだ

かやっぱりよく思われてないんだな、って」

いつもの強気な彼女が、下に俯いて囁くように喋っている。

何で？

彼女は更に続けた。

高校に入ってすぐ。私は学校の空気に馴れられなかったの。

中学校はまだ良かったんだ。前の友達がいたから。

けど、高校って色んなトコから人が来るでしょ？

見ず知らずの人と一緒に授業を受ける。

一緒に生活を共にする。

塾なんかとは違うその雰囲気、私はすっかり飲まれてた。

いつも学校に行くのが緊張の連続で、ほとんど周りの人と喋れなくなっ
て。

そんな毎日が続いて、私は思ったの。

こんな自分じゃダメだ！変えなきゃ！って。

今の自分と反するような性格なら、誰とでも話せるかもしれない。
積極的に、なろう。

そうすれば、友達もできるって。

でもね、それが裏目に出ちゃったの。

どんどんその性格が見られるようになって、後ろに引けなくなっ
てきた友達にも、本当の自分は見せられなかった。

それですぐに友達とは別れちゃった。

家に帰ったらさ、疲れと自分の馬鹿らしさに泣いてた。

枕抱えて、部屋の隅っこで。

ほんと、私ってバカ……。

また、その場に沈黙の空気が流れた。

「……なんで、そんな事俺に話すんだ」

「え？」

話しながら、彼女の目には涙がうつすらと溜まっていた。
俺はそれが見えたので、顔を向けられずに空に言葉を吐き出して
いた。

「椿・・・だから。椿だから、話したの」

「訳わかんねえ」

俺がそう言つて顔を背けると、彼女はひとつため息をついた。

「男は本当に鈍感なのね」

目の涙を拭いながら、立ち上がった。

鈍感、か。

確かにそうかもしれないな。

俺もひとつ、ため息を吐いた。

「何か飲みに行くか？」

「・・・いいわね」

彼女はいつもの調子で頷いた。

歩いていると、なんだか懐かしい風が身体を包む。

枯葉が舞い、乾いた空気が傍を流れる。

あの頃が、懐かしかった。

「父ちゃん、キャッチボールしようぜ！」

「んー・・・」

タバコの煙を吹かしながら、父は唸った。

「父ちゃん！」

「・・・バドミントンならいいぞー」

「ヤだ。父ちゃんすごい曲がるよーなのしか打つてこないんだもん」

「うはは」

父はバドミントンが上手かった。

高校時代からやっていたとか、そんな事を聞いた事がある。

すごく球が曲がっていくんだ。

タバコをプカプカと吹かせながら、

「うはは」と笑って。

なんだか得意げにしているのが懐かしい。

懐かしい風が吹いた。

なんだか、父さんと一緒に歩いた風景が帰ってきた気がした。

すれ違い様の空気。

触れると暖かく、感じると寒い。

そんな空気が流れている。

冷たい。陽が当たっているのに。

「寒い・・・ですね」

「そうだな・・・。大丈夫か？」

大村はマフラーを取ると、香坂の首に巻きつけた。

「えと・・・あの」

「気にすんな。俺は寒くないからよ」

「なあ谷口。お前　涼介と付き合ってるの？」

「え!？」

突然沢口が質問を投げかけた。

「あ、アイツとは何にもないよ。ただの幼馴染」

「ふうん」

ベンチに座り、さっきそこで買ってきたコーヒーを飲む。

青いベンチが、少し光っていた。

「お、やつほ。お二人さん」

「よ」

風向きのほうから、沢口と優利香がやってきた。

二人は俺らを見つけると、挨拶をしてからベンチに座った。
俺の隣に優利香。

後ろに七海。

右側向ここのベンチに沢口。

「マフラーとか手袋とか、持ってくれば良かったなあ」

「・・・飲むか？」

手を擦り合わせながら寒そうにしているの、俺は飲んでいたコーヒーを差し出した。

まだ湯気の出ているコーヒー。

「ありがと」

彼からコーヒーを受け取ると、暖かさが手のひら全体に伝わる。

缶に口を付け、コーヒーを一口飲んだ。

「あつたかい」

「そっか。よかった」

「でも苦い・・・」

ん、優利香はコーヒーが苦手か。

俺はうははと笑った。

「笑い事じゃないでしょ・・・」

彼女も笑った。

「お、大村たちが戻ってきた」

最後の二人、大村たちが戻ってきて俺ら4人は吃驚した。

まず、香坂の顔が真っ赤で、耳まで赤いと言う事。

もうひとつは、大村。

「大村・・・？」

「やっぱり寒かったんだな。マフラー巻いたんだ」

大村の首にはマフラーが巻いてあって、その片方の先端が香坂の首へと巻かれている。

その上、彼の左手は彼女の右手と繋がっていた。

「まさにラブラブカップルの格好だよな・・・？」

「そうだね・・・。大村君ってまさか・・・」

「そっかも知れねえ」

これじゃあ香坂が真っ赤になるのも頷ける。

「大村……。香坂がすつごく恥ずかしがってるんだけども」

「ん？うお、真っ赤じゃねえか」

大村はその事にやっと気づき、繋いでいた手を離れたあと自分のマフラーを解いて彼女にかけた。

自分のせいだろ、真っ赤なのは。と俺は心の中で呟いた。

「っ」

香坂は言葉を出す事もできず、その場で立ち尽くしてしまった。

「ったく、俺でもあんな事できねえよ」

優利香を見てそう呟き、立ち上がった。

また、冷たい風が吹き付ける。

「みんな、楽しめたか？」

「んー、それなりに」

「別に私も沢口君も何もしてないじゃん」

「そだっけ」

沢口は笑って言った。

「……。まあ、それなりに楽しんだんじゃないの？」

キツい口調で、七海が言う。

彼女はため息をついてこつちを見ていた。

やはりさっきの純粹な目とは違う、鋭い瞳。

彼女は何か、役に入りきっているようだった。

「……。七海。コイツらは大丈夫だよ。そんなにキツくしなくたっ

て」

彼女の傍でそう呟くと、突然彼女に口を押さえられた。

「その事は話さないで。話す時は、私が話すから」

「それじゃあずっとキツい性格のままじゃ……。」

「別にいいのよ。これで」

もごもごと、と唸る俺の口が開放されると、彼女はまたいつもの瞳に戻っていた。

これでいいのか。これで。

疾速したカラスが空を、大空を舞う。
それを横目に見るかのように、スズメが電線から見下ろしていた。
日が落ちて、綺麗な夕焼けが目映る。
キャッチボールをせがんだあの日も、こんな夕焼けだった。
土手に転がったボールを、必死に拾って投げる。
父から投げられたボールを必死にキャッチしてまた投げる。
楽しかったあの日。
もう戻ってこない、あの日。

「涼ちゃん？」

「うん？」

優利香に揺らされて、気がついた。

「どうしたの？空眺めて止まっちゃって」

「あー、いや。昔のコト思い出してただけだ」

頭を少し振って意識を戻す。

よし、戻ってきた。

「帰るん・・・ですか？」

「おう」

「みんなでまた、集まればいいね」

たった一日の、楽しい時間。

みんなで集まって遊んだのは、この日が最後になった。

・・・にしても。

どうにかしてほしいもんだ。

帰りに寄った店で、食事と一緒に大村がビールを頼んだ。

まあ普通はそんなことしちゃイケナイのだが。

「アンタ、学校にバレたらマズいんじゃない？」

と七海が呟いた。けれども

「別に大丈夫だって」

と軽く受け流して飲んだ。

それを見ていた優利香が、ゴクリと喉を鳴らした。

「私、あーゆーの飲んでみたかったんだ。チューハイ?とか」

「優利香、お前そーいうヤツだったんか」

俺はため息をついて、白米を口に運ぶ。

だが、彼女は俺の言葉など耳に入っていなかったらしく、

「大村君、ちよつと飲ましてもらっていい?」

「ちよつ、優利香!」

「・・・谷口さん!」

みんな(七海と沢口を除く。沢口は寝てるから)で止めたが、彼女は聞く耳を持たない。

つうか目が既にギラギラとしている。

「別にいいけど、ほら」

大村は傍にあつたコップの水を飲み干し、そのコップの中に注いだ。それ受け取ると、彼女は少しだけ舐めるように中の液体を飲んだ。

「んく・・・。ぶはっ」

舐めるように、だったのは最初だけだった。

意外と液体を飲んだ彼女の顔は、紅潮していた。

「優利香・・・?」

「ビールって、意外とおいしいねえー!」

突然元気になった彼女は、声を上げながら手をあげた。

「そうかー。そうだろー」

「煽るな大村!また飲んじまうだろー!!」

煽られても、優利香は飲まなかった。

”優利香”は。

「んく・・・はにゃっ」

優利香の隣から、不思議な声がある。

「香坂!?!」

「……はにやら？何でしょう、椿君」

彼女の目の前には、空のグラスがあった。
全部飲み干した。

「ほら大村！ お前が煽るからまた犠牲者が……」

「犠牲者って何だよ」

大村は呟いてビールを口に含んだ。

つか、二人とも酒に弱いのか……。

「どうすんだよ、二人」

「そうね、寝ちゃってるし」

飯も食い終わって帰る頃。優利香と香坂が寝に入ってしまった。

「どうしたもこうしたも……。連れて行くしかないんじゃないのか？」

つまみに焼き鳥を食べながら、大村が言う。

「……お前のせいだろ。と心の中で呟きながら、麦茶を口にする。

「俺はこのあと用事があるし」

「私は全く方向が違うわ」

え。

それってよ、もしかして。

「椿に任せるしかないわね」

「涼介に任せるわ」

二人がハモった。

「マジかよ……」

無駄にハモリやがって。

そこで俺は一度、二人を恨んだ。

で、今。

俺は二人を連れて歩いている。

「香坂、次どつち？」

「もうこのまま涼ちゃんち行こーよー」

香坂に聞いたはずが、何故か優利香の声が上がった。

あんなちよつとでこんなまで酔うか……。

つか俺の家だつて!?

「いいですねえー。行きましょー。ね？椿君」

「お、おい……」

優利香に釣られて、香坂が返事をした。

そして二人は、俺の意見を無視して両腕を引つ張っていった。

なんだか流されるまま、引つ張られる。

このままでいいのか良く分からなかったが、仕方なく引つ張られる事にした。

月が、俺たちを少し明るく照らした。

引つ張られるまま、流されるままに俺の家へと到着した。

「はやくあけて下さいよぉー」

「涼ちゃん、はやく、はやく!」

。。。。

このままでいいのだろうか。

男のむさ苦しい部屋に、女の子二人も連れてきていいのだろうか。
俺の頭の中で、葛藤が始まる。

どうするべきか。

このまま家に帰せば、まあ何事もなく無事に終わる。

けど、この酔った二人がすぐに返してくれるわけがない。

クソっ!

どうする。。。どうする。。。。

「あーもう!その酔いを寝て醒ましてけ!」

吹っ切れた俺は、二人を部屋へと押し込んだ。

酔いが醒めるまで寝かす。

そしたら帰らせる!

扉を開けると、二人が返事もなくドタドタと入っていく。

特に広くもない部屋。

キッチンがあり、向かいはトイレ。バスルーム。

その奥がリビング。

といっても、小さな机とベッドが置いてあるだけ。

ベッドのせいで半分くらいは場所を取っている。

「ここが涼ちゃんの部屋かぁー」

「なんだか綺麗ですねえ」

いろいろ言いながら、二人はベッドに腰掛けた。

縁から足をプラプラとさせ、二人でのほほんとしている。

「入っちゃったね、私たち」

「・・・そうですね」

俺は扉の鍵をキッチンと閉めると、キッチンに入った。

適当なコップを選んで、冷蔵庫の麦茶を注ぐ。

それを持って、リビングに向かった。

「涼ちゃん、ベッドふかふかだねー」

「・・・いいから、茶飲んで早く寝ろよ」

「なんでですか？」

机に置いた麦茶を、香坂が手に取る。

優利香も机の麦茶を手にとった。

「酔いを醒まして出ていつてもらいたいんだ。俺が手を出しかねないから。」

「手を、出す」

「ま、どうせ俺は離れて寝るけどな」

俺は奥のクローゼットから毛布を取り出すと、それをかけて壁に寄りかかった。

その光景を、二人はジッと見つめている。

「大丈夫だ。襲ったりなんかしねえよ」

彼女たちはそのあと少しこっちを見てから、互いに見つめ合って頷いた。

「寝よつか」

「そうですね・・・」

心なしか彼女たちの頬が赤かった。

酒のせいだな、と俺は思っただけで目を閉じた。

本当は、そゆことにちよつと興味があった。

あのひ、口付けを交わしてから何だか彼と会うときに体が火照る。それを悟られないようにしていた。

香坂さんと顔が向き合ったとき、彼女もそんな感じなんだろうなと思った。

本当は……。ううん、多分これはお酒のせい。

じゃなきゃこんな……。

こんな気持ちにはならないと思うから。

あの時谷山さんも、同じ気持ち……だったのかな？

ここはどこだ。

静まり返る空間。

その中に、ポツンと一人。

自分が立っていた。

遙か上空から降り注ぐ幾多の光が、一点。自分を照らしている。

その光が、まるでスポットライトのように見えた。

点在する光を幾つか覗いてみると、光の中には思い出が見える。

いつかのと同じものなのか。

明るく照らされた空間の中で、肌になにかが触れた。

ここはどこだ。

暗転終了。いつものことだ。

目が覚めると、片側に何かの感触を感じる。

「ん．．．なんだ．．．？」

見てみると、そこに香坂が寝ていた。

「うおおっ!？」

彼女は何故か上半身の服がはだけた状態で寝ていた。

何でこんな姿で寝てんだよっ．．．!？」

「．．．涼介．．．君」

「なっ」

起きたのか!？」

傾く彼女を確認すると、静かな寝息を立てている。

どうやら寝言のようだ。

なんだよ．．．焦らせやがって。

にしても、どうするか。

今からベッドに戻すとしても．．．っ。

「触るに触れねえだろ、コレ．．．」

寄りかかる彼女は、とても可愛い。

欲望が、少しずつ渦巻いてくる。

「涼介君．．．」

「っ!？」

何考えてんだ、俺は。

彼女の声で、正気を取り戻す。

しかし、そんな心を彼女は吹き飛ばした。

彼女は突然起きだすと、俺のほうへと視線を向けた。

「なんっ．．．」

「ワガママなんだよね?ここに．．．あたしがいることは」

「香坂、お前何言っつて．．．」

「ごめんね．．．。谷山さんと仲良くしてるのに。でもね、あたし．

っ」

彼女は一言飲み込んだあと、涼介に近づく。

彼女の眼が、真つすぐに輝く。

そして、彼女は俺を抱きしめた。

抱きしめたと言うより、身体を少し預けたに近い。

「あたしのワガママ。・・・少しガマンしてくださいますか？」

耳元で呟くように、彼女は言った。

俺は何も言えずにただ口を閉ざす。

いや、何も言えなかったんじゃない。言葉が何も浮かばなかったんだ。

はだけた服から感じる、数枚越しの彼女の体温。

それが、俺の心の中の何かを動かしている気がする。

「香坂」

この部屋には、優利香がいる。

こんな事してるなんて気が付かれたら、彼女を傷つけてしまう。

たとえ俺の本心でなくとも。

早く離れる、俺の身体。

こんな事。。。

静かに時が流れる。

ジヨウロ。。。

ブリキで造られたジヨウロが、部屋の中で意味深に光った。

「あたしのワガママ、ガマンしてくれますか・・・？」
その言葉に、何も答えられない俺。

置いてあつた時計の針が、やけに大きく音を立てる。

「香坂」

「なんですか、涼介君」

また、呟く。

いや、囁くかの如く言葉が聞こえる。

その声が、甘く柔らかい。

優利香から感じるのとは、また別のもの。

ブリキのジヨウロが、まだ部屋の中で光を放っている。

「何が、したいんだ？」

出た言葉が、問いかけ。

その問いかけに、彼女はゆっくり喋った。

「あたしはただ、涼介君と話がしたかっただけです。ただ・・・それだけです」

「じゃあ何でこんな形でしてんだ」

「抱きしめてる・・・コトですか？」

「ああ」

この状態を抱きしめていると言うかどうか分からないが、俺は頷く。

そんな事は大きくして問題じゃない。

「それはですね。なんというか、抱きしめたかったからと言うか。・

・涼介君を好きだからです。

さつき言いましたよね？ワガママ。って・・・」

「俺を？」

彼女の声質は、変わることなく囁かれた。

香坂も、俺のことを好きだと言う。

何でなんだ？

俺の何が、彼女たちの心を射止めているのか。
何かに打ち込むような熱い人間でもない。
大したルックスを持っていないわけでもない。
将来有望でもなければ、金がある裕福な家庭でもない。
あ……いや。

一応はあるが。

「一体何が、優利香を、香坂を動かすんだ？」
思わず、口に出してしまった。

あ、と呟いたが遅い。

部屋の中に、また沈黙が渦巻く。

「それは」

彼女は口を開いた。

「たぶん、やさしさです」

そう囁いて、彼女は俺から離れていく。

彼女の華奢な身体、未発達な身体が離れていく。

それが、名残惜しい。

……名残惜しい？なんで。

俺は優利香が好き。……そうだろ？

「じゃああたし、寝ますね」

優利香に気づかれないうちに、彼女はゆっくりとベッドの中へ潜り込んだ。

何が名残惜しい。

何が……っ。

感情を鎮めながら、俺は目を閉じた。

ここはどこだ。

また暗闇か。

そう、感じた。

いつもと変わらない、けれども雰囲気の異なる空間。

何かが違った。

光が差し込む場所。

その場所が、いつもより遥かに少ない。

何故？

『それは、のせいだよ』

どこからか、透き通ったガラスのような声がする。

しかし、言葉の間が良く聞こえない。

声の響かない空間に、『何のせいだって？』と叫ぶ。

『のせいなんだ』

透き通った声は脳に響くが、やはり一部分だけ聞こえない。

『聞こえないんだね。みんなの声も』

みんな？

みんなって誰だよ。

返答はない。

消えんなよ。行くな。暗闇だけが、静かに残る。

ここはどこだ。

光が眩しい。

朝なのか。頭がそう理解する。

「なーん」

蜜柑の音が、耳に響く。

分かった。飯だよな。

頭でそう言っても、なかなか目が覚めてくれない。

「なーん!!！」

大きな叫び声と共に、何かが顔を通る。

いつ……。

「痛ってエ!!！」

「なーん」

蜜柑が呑気な声を上げる。

やっぱり朝だった。

布団には、誰の姿もなかった。

意外にも早く起きてしまったので、とりあえず遅れずに学校へついた。

「くぁ……」

やっぱり眠気が襲っている。

昨日の夜のことを思い出して、もう一度あくび。

優利香には気づかれていないだろうか。

と。

「あ、優利香」

偶然廊下の先に、優利香を見つけた。

彼女は俺の顔を見ると、すぐに目を反らした。

「なあ、優利香」

声をかけようと近づくと、頬を叩かれた。

……え？

「ゆ……りか……?」

もう一度話しかけようとすると、彼女は足早に去っていった。

ひとつだけ聞こえた言葉は
「涼ちゃんのバカ」
だった。

冬休みまで残りもあまりないってのに。
俺はその日彼女に声を掛けまくった。

「優利香！」

そつぽを向かれた。

「優利香？」

そつぽを向かれた上に走り去られた。

「優利香！！」

突然ビンタを食らった。

しかも朝と同じ場所。

痛エ。ビンタは痛エ。

叩かれた頬を押さえながら、帰路に着く。

やっぱり、昨日の事なのか。

彼女が怒ってるのは。

それから一週間、彼女が口を聞いてくれることはなかった。

全てが全て、上手くいくわけがない。
そんなに上手に、世界は構成されてはいないのだから

page 12 サヨナラ

優利香がいなくなるまで、もう一週間を切った。
それなのに、彼女は一向に口を利こうとはしてくれない。
寒空の屋上で、俺は一人冷たい息を吐いた。
ふと、俺はある事に気が付く。

携帯の番号。

それを使えば、彼女と話ができる。

俺は早速、その番号を打った。

「090の

ボタンを押す手が震える。

断られたらどうしようか。

これ以外に、もう成す術はなくなる。

「もしもし？」

「優利香か！？」

彼女の声を聞いて、俺は声を強くして言った。

しかし、反応はない。

「聞きたいことがある。学校の 屋上に来てくれないか？」

また、返事はなかった。
そのまま、電話を切られた。

12月の空は寒い。

屋上に吹く風が、肌を痛く吹き付ける。

彼女はここに来ないかもしれない。

呆れられて、忘れられているかもしれない。

それでも俺は待ち続けた。

寒い屋上の、地面の上で。

どれだけ待っただろうか。

しばらくして、低く鈍い音が聞こえる。

屋上の扉の開く音。

この位置からじゃ見えない。

俺はすぐに、扉の前まで駆けた。

「あ

「優利香

本当にいたんだ、というような彼女の顔が、そこにはあった。

紛れもなく、彼女。

俺は彼女の手を掴むと、手摺のほうへと連れて行った。

暗い夜空の下に、明るい町並みが見える。

「・・・何よ

「それはこっちのセリフだ。何で俺を無視すんだ」

彼女に問いかけても、彼女は俺のほうを向いてはくれない。
やっぱり。

「何でだ!」

「それは。涼ちゃんが香坂さんと抱き合って・・・だからやっぱり、気づかれてた。」

「こういうときの女は、気づきやすいもんなのか。」

「おい、アレはな。香坂が勝手に」

「言い訳なんてしないで! やっぱり私じゃダメなんですよ? 香坂さんの方がいいんでしょう? どうせ私は魅力なんかないもんね」

「ちよつ、優利香!」

「いい機会だよ、涼ちゃん。このまま何もなかったことにしようよ。ね?」

優利香は俯きながら叫び、小さな声でそう言った。

ナカツタコトニシヨウヨ。

その言葉が、深く俺の頭を突き抜ける。

確かに、アレは俺も悪い。

何も言えなかったんだから。けど。

「何もなかった事になんて、できるわけないだろ!?!?」

そう叫んで、俺は彼女の腕を掴んだ。

華奢な彼女の腕は、細かった。

「止めて! 触らないで! こつちを見ないで!」

彼女は必死に抵抗し、俺の腕を離そうとする。

彼女の声は、震えていた。

「俺はこのままにする気はねえんだ!」

もがく彼女をギュツと引き寄せ、腕の中で抱きしめた。

彼女の瞳から、滴が零れ落ちている。

「何で・・・泣くんだよ・・・」

「だって・・・だって・・・」

瞳から溢れる涙は、止まらない。

まるで止まることを知らない滝のように、溢れ出ている。

彼女は俺の腕の中で、声を上げて泣いた。

何も、してやることができない。

ただ彼女のために、こうやって包み込んであげる事しか。

「もう・・・サヨナラなんだよ・・・？」

しゃくり上げるような泣き声に混じって、微かに聞こえた声。

その言葉が、胸を締め付ける。

もう、サヨナラ。

会えなくなる、彼女と。

いつか会えるかもしれないし、もしかしたらもう会えないかもしれない。

なのに、互いが互いに思いあう。

「あ」

気が付くと、俺の頬にも暖かいものが伝っている。涙だ。

身体が、心が離れたくないって叫んでいる。

「俺も、離れ離れにはなりたくねエよ」

彼女を抱きしめる力が、強まった。

いや、強めた。

「涼ちゃん・・・イヤだよ・・・。私・・・」

「そんな事言っただって、お前の夢の為なんだろ？ だったら 夢を掴めよ」

「でもっ・・・!!」

「夢に手が届くのは今しかねエんだぞ!!! 俺なんて置いてけよ!!!」

目をつぶり、彼女の顔の傍で俺は叫んだ。

本当は俺を選んでほしい。

けど、彼女の夢のため。

俺を捨てていく覚悟でなきや、夢なんて叶えらんねエよ

「置いてく・・・なんて・・・」

彼女の泣き声が、かすれる。

「できるわけないじゃん・・・バカぁ・・・」

弱々しい力が、俺を抱きしめた。

彼女の鼓動が、何度も何度も伝わってくる。

「バカあ・・・バカあ・・・」

「だったら、夢を諦めんのか？」

彼女の耳元で囁く。

けれど、何も返ってこない。

哀しいときに大声で泣ける、寂しがり屋の彼女。

泣きながら。彼女はまた俺を抱きしめていた。

弱々しく、俺に身体を預けていた。

彼女の涙に触れると、とても熱かった。

彼女の瞳は澄んでいて綺麗だった。

彼女の唇は、柔らかくて甘かった。

息を止める、彼女との口付け。

唇を離すと、彼女は息を漏らした。

何で息とめるんだよ。

なんでかな、なんでだろ。

それだと舌とか入れるとき大変だぞ。

舌っ!?!涼ちゃんってば!!

まあ、可愛いからいいんだけどな。

俺はまた、彼女の唇を塞いだ。

彼女を更に抱き寄せ、息を止めてる彼女の口に舌を入れた。

「っ!?!?」

彼女は驚いて声にならない声を上げる。

それでも俺は、彼女の舌を追い回した。

「んっ・・・」

閉じた口から、甘い吐息が漏れる。

舌を絡ませ、口の中を泳ぎまわる。

目を閉じているから、その状況がより明確に脳に伝わってくる。

「ぶわぁ」

「っは」

絡め合った舌を離し、舌を離した。

銀色の糸が口を伝う。

「なんだか・・・すごいね」

「意外と上手いんじゃないのか?」

「もう!涼ちゃんがいきなりやるからでしょ!」

彼女は顔を真っ赤にして、また叩いてきた。

さっきのよりは、少し強かった。

屋上を出た俺たちは、そのまま俺の家へと向かった。

「二次会、みたいなモノかな」

「わかんね」

小さいベッドの上で、二人きり。

俺たちは座っている。

空気が空気なのか、二人して恥ずかしがり、前に出ようとしなかった。

「・・・」

「て、繋ごつか」

沈黙を破ったのは、彼女の優しい声だった。

「・・・おう」

俯いた彼女の一言に、答える。

ゆっくりと手を伸ばし、しっかりと握った。

彼女の手は、華奢な身体と同じで細く、綺麗だ。

触れると彼女の温もりが、じっくりと身体の芯に伝わってくる。

握っている間、俺はたぶん顔が真っ赤だったろう。

そのあとの事はヒミツだ。誰にも言わねえ。

俺と優利香だけの、秘密だ。

別にやましい事は何も無いぞ。

ただ、うん。

やましいことはなにもない。

ベッドの上に、二人で寝転ぶ。

天井が、やけに近く感じられた。

「本当に、大丈夫？」

「何が」

少し服のはだけた彼女が、俺の手を握ってきた。

「私がいなくなっても」

「・・・」

俺はその手を握り返した。

「大丈夫じゃないかもね。寂しがり屋の涼ちゃんだし」

「分かんねエ。多分泣くかも」

俺の言葉に、彼女があはは、と笑う。

笑うなよ、と俺は呟いた。

「二股とか、そういうのしないですよ？」

「おう。分かんねエけど」

「ひどい。涼ちゃんひどい」

二人でまた、笑った。

笑いあった。

彼女の笑顔は綺麗で、眩しかった。

窓から日の光が差し込む。

蜜柑の鳴き声が、部屋の隅から聞こえた。

心の中が、白く澄んだ気持ちになった。

ここはどこだ。

夢ではない夢のどこか。

光の差す事のない、空間のどこか。

亜空間？異空間？

全く分からない場所に、俺は放り出されている。

っ！？

止めるよ、邪魔すんな！

空間が、闇がついに俺の脚を掴んだ。

離せよ！離せ！

俺はそんなところに引きずり込まれる気はないんだ！

俺は・・・俺は　。

ここはどこだ。

目を開くと、彼女が寝ていた。

布団に包まり、静かな寝息を立てている。

彼女の寝顔が、可愛かった。

交わった時は、全てを映し出す。
例えそれが雁であつても。

page 14 ベル。

寒空の下、彼女を見送る。

今日はその日だ。

別にもう、寂しくはない。

悲しくもない。

彼女とは見えない場所で手を繋いでいるから。

「もう、か」

「そうだな・・・」

ホームの上で、右側から来る電車を待った。

その一秒一秒が、実は怖かった。

寂しくも悲しくもないけど、怖かった。

もういなくなるんだと言う、そのことが。

「あ、あのさ・・・」

「ん？」

彼女が少し俯いて口を開いた。

少しの間、沈黙の空気が流れる。

その空気が、何だか息を苦しくした。

「本当に大丈夫？」

「何がだよ」

「私がいなくて」

彼女は俺の手を掴んだ。

心臓がトクンと疼いた。

そんな目で俺を見るなよ。

俺は心の中でそう呟く。

綺麗に光る彼女のつぶらな瞳に弱いんだから。

その彼女の瞳を、少しだけ見つめる。

キラキラしていた。

ずっと見つめていたかった。

「・・・涼ちゃん？」

「ん？」

「私の顔、何かついてる？」

「いや、ついてねーよ」

視線の先を、彼女の瞳から顔へと移した。

本当は抱きしめたかった。

抱きしめて離したくなかった。

けど、もう。

いいんだ。

そんなことしたら本当に戻れなくなる。

心なしか、気のせいかな。

彼女の瞳がこつちを向いたとき、心の中を覗かれた気がした。

彼の視線が私の顔じゃなくて私の眼に向いているのが分かった。
昔からそうだ。

彼は私を見ると、時折私の瞳を見ている。

・・・忘れてると思うけど、子供の頃に聞いたことがあった。
“何で私の目を見るの？”って。
すると

“それはね、ゆりかの目がきれいだからだよ”
そう、言ってたっけ。

今でも変わってないんだよね。

涼ちゃんってば。

私は心の中で微笑んだ。

彼が目を背けたのも、私が気づいたと思ったからかな。

いいのに、私は。

涼ちゃんが好きだから。

ホームに電車の来る音が響いた。
もう・・・か。

後悔したって遅いんだ。優利香の背中を押したのは俺だ。

そう言い聞かせていたけど、気がつけば俺は彼女の手を掴んでいた。

そして、彼女の華奢な身体を抱きしめる。

「ちよっと、涼ちゃん？」

彼女の声が聞こえたけど、聞かずに肩に顔をうずめた。

何で俺はこんな性格なんだ。

強気なコト言っつて、最後は弱くなってしまう。

「電車来ちゃうから・・・さ」

「別に、そんなに人は来ないだろ」

胸が痛い。

彼女のコトを考えていたのに、今は自分のコトしか考えていない。
なんで。

なんでなんでなんで。

なんでなんだよッ……。

「涼ちゃん」

ふいに、耳元で彼女の囁く声が聞こえる。

「いいんだよ、そんなに悩まなくっても。私が残れば、それでさ

」

「だから、それじゃ駄目だろ!!」

電車の停車する音で、声が少しかき消された。

程なくして扉の開く音がした。

「だって……こんなに涼ちゃん……」

「俺は優利香に触れられただけでいい」

彼女を身体から離すと、電車の扉を指差した。

少し乱れた呼吸を整えて、言う。

「行ってくれ」

「……でも」

「早く、してくれ。取り返しのつかないことしちまうから」

そう言って、俺は一、二歩後ずさった。

彼女は少し震えながら、それでもコクンと頷いた。

電車に乗り込んだ彼女の瞳は、悲しそうに震えている。

「約束……だよ。絶対また逢えるよね？」

震えた唇から、精一杯の言葉が聞こえる。

強がってる口調だけど、本当は優しさのこもった口調。

「当たり前だ。逢えるに決まってるっての」

アナウンスの方から、発車のベルが鳴り響く。

そして、俺と優利香の間のドアが閉まった。

彼女は笑っていた。

精一杯の笑顔だったんだろう。

俺はその笑顔に、手を振った。
泣いてたと知っていても、手を振った。
電車が見えなくなるまで。

そしてそこで、意識が途切れた。

夢から醒めても夢。

現実には暗闇世界と共に。

夢から醒めると、辺りは暗かった。

身体が宙に浮いている感覚。

周り全てが黒、黒、黒。

暗闇に染まっている。

ここは、どこだ？

見送った直後からの意識がない。

目が醒めたらこの場所に。

いや、“夢”から醒めたと理解して。

途端に、頭に電気が走るような感覚を感じた。

そして、全てを思い出す。

この場所の意味も。

“夢”を見終えたんだと確信した。

感じる。

聞こえる。

聞こえたのは、不確かな旋律。

感じたのは、重たい怒涛の圧力。

忘れていただけ。

思い出せなかっただけ。

俺を掴んだ空間は、迷う俺を引きずり込むためのもの。

彷徨っているだけだった。

現実の俺は意識をなくしている。

この世界は 生と死の狭間だったんだ。

黒い空間を見つめながら、俺はため息をつく。

足を掴まれていたのは、もう死期が近いからか？

もう戻れないのかもしれない。

そう思うと、不思議と身体が軽く感じられた。

優利香と会うこともない。

香坂と会うこともない。

七海と怒鳴ることもない。

沢口とダベルすることもない。

大村と呑気に昼寝することもない。

もう 。

暗闇が俺の身体を欲している。
蝕むように、喰らうように。

俺の身体は闇を受け入れていった。
死ぬんだ。

全てが終わると思ったとき、不意に声が聞こえた。
懐かしい声。

耳を傾けながら、沈む。

“最後に聞いた声”だと理解して。

手術中のランプが消えない。

いや、消えた時が一番の恐怖なんだ。

私はそう思いながら、手術室のほうを向いていた。

「なんでこんなことに」

「知らねエよ！なんでこんな」

沢口君が怒鳴った。

そう、誰もわからない。

気がつくとは彼は傷だらけで病院へと運ばれていた。

この事件の真相なんて、誰も知らないんだ。

その時だった。

小さな足音が、病院を小さく揺らした。

駆けて来る音。
息を切らせて、少女は辿り着いた。

飲まれたまま、全てを包み込まれる。
目を開けているのに、視界が真っ暗。
あー、でも。

なんかいつも夢見てるのと同じ……。
いや、少し違う。

醒め、ない。
これ以上。

“夢”ではないんだ。
俺の身体が闇に包まれているのは、夢ではないから。
暗闇は、死。

俺を取り込んでるのは、死。
見えない視界もさらに薄くなり、意識が遠のいた。

その時だった。

「……ちゃん……」
何か聞こえた。

「……ちゃん」
懐かしい……声？

耳を傾けながら、俺は沈んでいく。

「涼……やん……」

“最後に聞いた声”。

俺が好きだった声。

離したくなかった。

彼女。

「涼ちゃん!!!」

叫び声が耳を貫き、脳を刺激した。

同時に彼女の手が、沈んでいった俺の手を掴んだ。

夢から醒めたら暗かった。
けれど、その中に一つ光を見つけた。
光に俺は引つ張られたんだろう。

暗い病院の中で4人。

必死で彼のことを待っていた。

赤いランプは消えてくれない。

もしかすると、このランプが消えたとき。

彼は。

「何心配してんの。大丈夫だよ、アイツなら」

「そう言ってるお前だって、身体震えてっぞ」

「っ」

七海さんが元気付けようとしてくれたけど、大村君が俯きながら咳いた。

みんな、心配してる。

その時だった。

小さな足音が聞こえたのは。

足音が次第に大きくなっていく。
暗い病院に、なんなんだ。

足音が止まるのとともに、人影が現れた。

人影は茶色のコートを身に纏い、息を切らせている。

「はっ……、はっ……」

着ていたコートが揺らぎなびいた。

黒髪が、それにつられてなびく。

彼女は。

「谷山……？」

「谷山さん……」

「谷山……さん」

「優利香ちゃん」

沢口君、私、七海ちゃん、大村君と、続けて口にした。

その場に現れたのは、谷山さんだった。

彼女は少し呼吸をしながら、それでも息を切らせて口を開いた。

「涼ちゃ……が……倒れたって……聞いたか……ら」

彼女は持っていた鞆を長椅子に置くと、手術室の扉へと向かった。

「谷山さ」

止めたけど、聞いていなかったんだろう。

真っ直ぐにしか、彼女の目は向いていない。

扉の前で、息を吸い込んで、吐き出して、もう一度吸い込んだ。

そして。

「涼ちゃん……!!」

思い切り、彼女は叫んだ。

瞳に涙を溜めて、叫ぶ。

「涼ちゃん、涼ちゃん！」

叫んでる。

私たちはただ、黙っていることしかできなかったというのに。

彼女と私とじゃ・・・、私達とじゃ違うのかな・・・。

「絶対・・・絶対また逢えるって・・・言ってたじゃんかア！！！！

！！

そこまで叫ぶと、彼女は膝から崩れ落ちた。

溢れる涙を止めることなく。

涙を流して嗚咽を漏らして。

ぐちゃぐちゃになっていた。

当然だよな。

好きな人が、死ぬかもしれないんだから。

あれ。

あれ、あれ、あれ？

私、涼介くんのこと好きなのに・・・。

何で、涙の一粒も出ないんだろう。

心が痛くならないんだろう。

「涼ちゃん！」

私の声が、病院内に響いた。

めいっぱい叫んだ。

ダメなんだろうけど、それでも叫んだ。
彼に届くように。

「涼ちゃん!!」

何回か叫んで、私は崩れ落ちた。

叫んでもダメだって分かってる。

分かってるのに。

その結果が　　これか。

私力じゃ、もうどうすることもできない。

それが心の中で分かった途端に、滝のように涙が流れた。

溢れて、止まらない。

顔がぐしゃぐしゃに、なる。

その時だった。

手術中のランプの点灯が、消えた。

夢が醒めた。

しつかりと掴んだ手を、俺は離さない。

その向こうに、笑顔を見たから。

その笑顔は、まるで花のよう。

明るく黄色に咲く 太陽の花。

あの空間を巡り巡って、辿り着いた。

俺は生きている。

微かな生への光、命の光を俺はしつかり掴んでいた。

目を開けると、そこはベッドの上だった。

ああ、そうだった。

昨日の晩、お酒に酔って布団に倒れたんだっけ。

ゆっくりと自分の状態を把握したあと、軽く伸びをする。ふと、傍にあつた小さなテレビ越しの自分に目が行った。髪ボサボサ。自分の髪の毛にため息が漏れた。

まあ、それでもいいかと思つて、朝食の準備をすることにした。手早く油を引いて卵を落とし、目玉焼き。

同時にチン、と言う音が鳴る。トースト。

コーヒーメーカーで沸いたコーヒーを注ぐ。できあがり、と。そういえばと思つて、最近買ったジャムをトーストに塗った。

「なーん」

机につくと、蜜柑が泣き声をあげた。

どうやらご飯を待っていたらしい。

急いでミルクを注いで、蜜柑にあげた。

「なーん」

どうやら喜んでるみたいだ。

よかったよかった。

「ごちそうさまでした、っと」

手をパンと合わせて、食べ終える。

えっと……。

今日は休みなんだっけか。

朝の頭は、どうやら活発じゃないらしい。

休みだつて言うことも忘れてた。

それと……うん。

また眠くなつてきてしまった。

最近頑張ってるからだろうか。

心が休まってるからだろうか。

「寝れる時に寝とこ……」

そう呟きながら、私は布団へダイブした。

あれから二年ぐらい経っただろうか。

私は上京して、大学に入学して一人暮らしを始めた。
あれ以来“彼”とは逢っていない。

大丈夫だと、分かったから。
それにしても。

彼に背中を押されて飛び出して、本当によかった。

自分のしたいことが、やりたいことが、楽しくできる。
充実した毎日が、送れていると思うんだ。

「ありがとう」って言いたかったけれど、止めておいた。
待つことにしたんだ、彼を。

絶対に来るって信じてるから。

太陽の光が気持ちいい。

身体の中から暖まる感じ。

今年は降らないのかな？

雪。大好きな。

少しだけ開いた世界の隙間から。

ちよつとだけ覗いてみたんだ。

世界>そと<の景色。

それは広大で雄大で、広くてでっかくて。

これが自分がある世界なんだって、驚いて。
けど、感動して。心が震えて。
抱きしめたくなくて。

けれど本当は狭くて、小さくて。

自分の周りだけが自分の世界。

小さくて狭いけど、広大で雄大な世界。

天井も壁もない世界。

自分だけの世界。

自分だけが見れる、世界>そと<の景色。

それが、じぶんの、じぶんだけの、きれいな、せかい。

部屋の中に、静かな寝息が聞こえる。

e p i l o g u e 雪とノート

私の世界と彼の世界、何色に染まっただろうか。
彼が振り向くまで。私は、歩くことを止めない。
彼にだけ見せた姿。あれが本当の私。そう。
奔放に生活して奔放に生きて。アイツとは違う、俺の姿。
昼寝して欠伸。その繰り返し。それが俺。

俺はどんな風に生きてきたのか。どんな風に生きるのか。

e p i l o g u e 雪とノート

時代は変わっていく、なんていうけど。

この07の年はさして変わっていないと思う。

立ち並ぶビルを屋上から眺めて、私は思った。

なんて綺麗で汚い町なんだ、と。

ポケットからiPodを取り出し、最近気に入ってる曲を聴く。

虹色の声をしたアーティスト。

テレビになど出てないから、素顔とかは知らないけど。

きつと、いい人なんだろう。

元気にやっってるだろうか。
ふと、そんなことが頭を過ぎった。
もしかして、忘れてるかもとか。違う一女>>ヤツ<<と付き合っ
てるとか。
まあ色々考えて、一つため息をつく。
別にいつか。2年も前だし。
気にしない気にしない。

そんな時、携帯電話が唸った。

「っっ」

噂をすれば何とやら、なのか。

驚いて、焦って、とりあえずは深呼吸。

そして、ケータイを開いた。

「・・・メール」

だった。

相手は　　、香坂さん。

「 To : yurika913r&t@xxx.ne .
jp

題名：お久しぶりです。

本文：お久しぶりです。

メール返していなくてスイマセン。

今日は、涼介君がそっちに向かったのでお伝えしておき
ました。

由紀

やっぱり、噂をすれば何とやらなのかな。

「涼介君、どうしてるかな」

「さあな。でも、二年もガマンしてたんだ。たまってるんじゃないの？」

「ちよつ、沢口君！」

「ん？アレだよ。谷山への想いだよ」

彼は笑うと、タバコに火をつけた。

煙が風になびいて、こっちへ飛んでくる。

「沢口君・・・けむた・・・っ、っほっ・・・」

「ん、悪イ」

沢口君は少し向きを変えると、煙を勢いよく吐き出した。

「メール、見てくれたかな。谷山さん」

「まあ。見たら驚いてテンパるかもな」

「・・・そだね」

私はクスツと笑って答えた。

彼はタバコを吸い終わると、スツと歩き出した。

その彼の腕に、私は掴まる。

「・・・なんだよ」

「ん？新しい恋をみつけるぞー！ってね」

「そりゃ頑張れ。この前見たくならないように、な
「うん」

私は笑って答えた。

明るい私があるのは、彼のおかげ。

でも彼は 本心に好きな人のところに、走っていったんだ。

相変わらずこいつは、静かに寝息を立てて……。
まったく。

「起きなさい。勉強するんでしょ？」

「ふぁ。七海……かよ」

寝言のように、彼は答えた。

そしてまた眠りに落ちる。

もう本当に、2年前から変わってない。

「ほら、起きろ大村！起きてよ、もう！！」

彼の背中を叩くが、反応なし。

私はため息をついて壁に凭れた。

アレから二年……。

アイツを見るとそうは思わないものの、早いものだ。

椿は元気にしてるだろうか。

もう行っちゃったのだろうか。

前からラブラブなんだろうか。

乙女心が、色々な妄想を膨らませる。

私だって、アイツのこと。。。

「あーもう！何でこんなこと考えて……ッ」

「ふぁ・・・つく。何か言った？」

突然、コタツで寝ていた大村がのそつと身体を起こした。彼は頭を掻くと、

「くぁ」という変な声を出した。

どうかしたんだろうか、と聞いてみると

「んー、コーヒーが欲しい。瞼が下りちまっ」

「・・・ったく」

起きたと思ったらおねだりですか。

それで動く私も私だと思っただけ。

ため息をついて、私はコーヒーメーカーの前に立った。

熱いコーヒーが湯気を立ててる。いい匂いだ。

「あ、言うの忘れてた」

「なによ」

とぼけた声で言ったので、私は言葉を強くした。

そこに少しの沈黙が起こる。

まるで私が起こしたかのような。

注ぎ終わったコーヒーコップを持って、その沈黙の真ん中へ。

机にコップを置いたその時だった。

「俺、お前のコト好きらしい」

「・・・え？」

思いもよらない言葉が、彼の口から漏れた。

当然それもとぼけた声。

よく状況が飲み込めず、ぽかんとしていると

「好き、らしい」

「えと・・・あの・・・私・・・は、性格が」

「性格なんて、後々分かって行くさ。今のお前が、俺は好き。それ

だけだよ・・・っつ」

机の上に置かれたコーヒーを、彼は少し口にした。

「えと、あの、その」

私はさらに戸惑って、地に戻って言葉が出なくなってしまった。

「とにかく、勉強しようぜ。俺このままだとまた大学落ちちまうよ」「う・・・うん」
どうやら神サマは、私にいじわるをしたらしい。
アイツを思っていたのに、大村からの。
彼のいつもの感じに、何故か今日は心が動いた。
少し、考えて、見ようか。な。

それぞれの道は、それぞれの眼前に落ちる。

それが幻であるかもしれないし。

現実であるかもしれないし。

掴めないかもしれないし。

掴めるかもしれない。

それは自分たちが決めることだ。

掴み取ればもがけばいい。現実であつて欲しいなら願えばいい。

道はそれぞれの場所にある。

それを瞳に入れるのも、見逃すのも、手にするのも、落とすのも、

進むのも、戻るのも。

自分次第。

自由、なんだな。

屋上を飛び出した。

昼休みに学校を早退した。
どうすればいいか分からなかった。
けど、走った。
一生懸命走った。

たどり着いたのは、このあたりで一番大きい駅。
見れば分かるような大きな駅。
正面まで来て、息が切れた。
こんなんで息が切れるなんて。
運動しておけばよかったなあ、なんて後悔した。
けど、そんなことはどうでもいい。
どうすれば。

と、誰かに肩を叩かれた。
いや、それは誰かの肩がぶつかったのかもしれない。
何かがぶつかったのかもしいない。
気になってそつちを振り向いた。
振り向くと、指がぼにゅっと頬に触れた。
「久し振り」
彼は笑ってそう言った。

一ヶ月足らずで、雪が降った。
その日、彼と一緒に私は外に出かけた。

寒いからコートを着て、二人で手を繋いで。

私の左手は、すっぱり彼の右ポケットに。

「綺麗だね」

「そうだな」

一面の白い世界は、まるで銀世界だった。

隣を歩いていった少年少女の声が、少し聞こえた。

次の曲はどんなのにしようか。

「やっぱり”虹”が入ってるほうがいいのかな。私たちらしいって言うか。」

さあ。袖花に任せるよ。

二人は笑いながら歩いていった。

楽しそうだなあ。

そうだ、と私は彼に話しかけた。

「ねえ、涼ちゃん」

私が声をかけると、

「何」と彼は返して来た。

「抱きついてもいい？」

は？なんでだよ、恥ずかしい。彼は横を向いて答えた。

「いいじゃん」

私はそう言っつて、彼にしがみつく。

嫌がる彼を、私は楽しそうに笑った。

雪とコートに、キミの笑顔が重なった。

二人の笑顔が重なった。

あ、雪。

私の声に、彼の顔が空を向く。

ほんとだ。

綺麗だね。

そうだな。

私たちは、笑いあった。

雪とコートと、キミの笑顔の物語。
俺はそれを、隣で見っていた。

. . . f i n

e p i l o g u e 雪とポート（後書き）

連作小説を載せさせていただきました。これは前からできていたものなので、早かったです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1745c/>

雪とコートとキミの笑顔

2010年12月26日14時22分発行